

## 【報 告】

## 在宅看護学実習（ハイブリッド型）における オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果と課題 — 学生アンケートの結果から —

天谷尚子、平山香代子、麻生保子

### Online system for Home Care Nursing Practicum (Hybrid type) Effects and challenges of remote conference — From the results of the student questionnaire survey —

AMAYA Naoko, HIRAYAMA Kayoko, ASO Yasuko

#### 要旨

本研究の目的は、在宅看護学実習（ハイブリッド型）におけるオンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果と課題について明らかにすることである。実習終了後の学生116名を対象に選択式及び自由記述式でWebアンケート調査を実施した。

遠隔カンファレンスに対する『学びの表現』『学びの効果』『対面相応の効果』を問う質問に対して、「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生は合わせて84%～100%であった。

遠隔カンファレンスの効果と課題に関連する記述内容の意味を損なわないようにコード化し、内容の類似するものを集約してカテゴリを作成した。オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果については【自身の学びが拡張した】【他施設で実習している学生の学びを自身の実習で活用できた】【対面よりも意見が発表しやすかった】【遠隔でも対面と相応にカンファレンスを実施できた】ことが明らかになった。課題については【遠隔カンファレンスに対する不慣れ感がある】【運営方法によって教育効果に差が生じる可能性がある】【参加する学生のICT環境によって教育効果に差が生じる可能性がある】ことが明らかとなった。

オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスにおいても学生同士の意見交換や教員からの指導が受けられたことで、対面と相応の教育効果を得ることができたと考える。一方、課題に対しては、学生への配慮、運営方法の検討やICT環境におけるトラブルに備えた事前の対応が不可欠であることが分かった。今後、さらなる教育効果を目指し、オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの利点を効果的に取り入れた実習設計の検討が示唆された。

**キーワード：**在宅看護学実習・home care nursing practicum、ハイブリッド型・Hybrid type、  
遠隔カンファレンス・remote conference、新型コロナウイルス感染症・Coronavirus Disease

#### I. はじめに

2019年12月に発生した新型コロナウイルス感染症拡大の影響によって、医療系学生の実習時間の短縮

や実習中止等が余儀なくされた。本学における在宅看護学実習では、一部施設において新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、カンファレンスの中止や教員の参加が制限される事態となった。

2020年5月1日に文部科学省より看護師養成所等へ「遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取り扱い等について」の通達があり、遠隔授業においても面接授業に相応する教育効果が求められている<sup>1)</sup>。そこで、本学の在宅看護学実習では、ハイブリッド型を取り入れ、午前は臨地実習、午後からは自宅でオンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスを実施した。遠隔カンファレンスには異なる施設で実習中の学生6名～10名（一施設につき2～3名）と担当教員1名が参加した。先行研究では、オンラインシステムを用いた実習の報告<sup>2) 3) 4)</sup>は散見されるが、ハイブリッド型におけるオンラインシステムを用いたカンファレンスの効果や課題を検証したものは見当たらない。そこで、本研究は在宅看護学実習（ハイブリッド型）におけるオンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果と課題について報告する。

## II. 目的

在宅看護学実習（ハイブリッド型）におけるオンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果と課題について明らかにする。

## III. 用語の定義

本稿では、以下の意味で用語を用いることとする。

1. 臨地実習：主に訪問看護ステーション等の実習施設を中心に行う実習（同行訪問等）。
2. 遠隔カンファレンス：学生が自宅から参加するオンラインシステムを用いたカンファレンス。
3. ハイブリッド型：対面授業（臨地実習）と遠隔授業（遠隔カンファレンス）を組み合わせた実習。

## IV. 方法

### 1. 在宅看護学実習について

#### 1) 在宅看護学実習の概要

本科目は2単位（90時間）である。全5期、10日間／期のうち、学内実習4日間、臨地実習6日間で構成されている（図1）。1週目および2週目の火曜日、水曜日の計4回で「ハイブリッド型（点線枠）」を実施した。午前中は臨地実習（訪問看護師と同行訪問1～2件）、午後から学生は自宅からオンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスに参加し、終了後は、課題を実施した。臨地実習最終日には実習施設で「最終カンファレンス」を1回実施した。

#### 2) 遠隔カンファレンスの内容

学生は午前の臨地実習終了後は速やかに自宅へ帰宅した。自宅から、各自のデバイスを使用し、遠隔カンファレンスへ参加した。学生は全員が入学時に貸与されたタブレットを持っているが、特にデバイスの指定

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1週目	午前		臨地実習	臨地実習	臨地実習
	午後	学内実習	遠隔カンファレンス 課題	遠隔カンファレンス 課題	課題
2週目	午前		臨地実習	臨地実習	臨地実習 最終カンファレンス
	午後	学内実習	遠隔カンファレンス 課題	遠隔カンファレンス 課題	課題

図1. 在宅看護学実習のスケジュール



図2. 分科会でのオンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスのイメージ

はしなかった。遠隔カンファレンスへ参加する際は、学生名を表示し、お互いの表情を確認できるカメラ設定を指示した(図2)。

はじめに、全体会にて、当該期の学生が全員集合し、教員が出欠の確認、カンファレンスの説明等を実施する(10分)。次に、担当教員毎の分科会に分かれる。分科会では、異なる施設で実習中の計3グループ～5グループ(1グループ:2名程度)が参加した。学生が司会を担当し、各学生がその日の実習の学びを発表後、意見交換や質問を行った。教員の講評終了後(40分)に全体会に戻り、教員が全体に向けたフィードバックや連絡を行う。会の運営やコントロールは科目責任者が担当した(図3)。

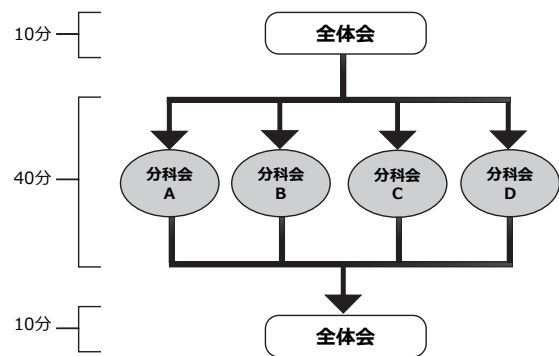


図3. オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの流れとタイムスケジュール

## 2. 研究対象と調査期間

研究対象は、A大学看護学科4年次生の在宅看護学実習を履修した116名とした。調査期間は2022年5月～2022年8月であった。

## 3. 調査方法

Web上でアンケートに回答する調査方法とした。本科目が終了した時点で、研究対象者となる学生は、学生自身のデバイスから、紙面に印刷したQRコード、またはA大学のクラウド型教育支援サービスにアクセスし、リンク先をクリックしてアンケートに回答するように依頼した。

## 4. 調査内容

選択式および自由記述式にて調査を実施した。各調査項目における設問と選択肢等を次ページに示す(表1)。

## 5. 分析方法

選択式の回答は単純集計を行った。自由記述式の回答は、記述内容の意味を損なわないようにコード化し、内容の類似するものを集約してサブカテゴリ化した。さらにサブカテゴリをカテゴリに分類した。

## 6. 倫理的配慮

学生へ紙面および口頭にて、調査はオンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果と課題を明らかにすることを目的としたものであり、アンケートは、無記名、個人が特定できないような設定(メールアドレスの収集をしない)で回収することを説明した。また、成績評価には一切影響しないことを伝え、承諾を得た。本研究は研究者所属大学の倫理審査委員会の承認を得た後に実施した(承認番号:2152)。

表1. オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスに対する各調査項目における設問と選択肢等

調査項目	設問	選択肢等
学びの表現	1. 自身の実習の学びについて発表できた	
	2. 学生同士でディスカッションを行えた	
学びの効果	3. 他施設で実習をしている学生と情報や学びの共有ができた	
	4. 他施設で実習をしている学生の情報や学びを共有することは、自身の学びに効果的だった	「非常にそう思う」 「そう思う」
	5. 遠隔カンファレンスで得た学びや気づきを自身の実習で活用できた	「あまりそう思わない」 「全くそう思わない」
対面相応の効果	6. 遠隔カンファレンスでは、対面カンファレンス相応の学びを得られた	
	7. 遠隔カンファレンスでは、教員から対面カンファレンス相応の指導を受けられた	
	8. 遠隔カンファレンスでは必要時、教員に質問や相談ができた	
	9. 遠隔カンファレンスは通信や機器のトラブルなくスムーズに実施できた	
	10. 自宅のネットワーク環境は整っていた	
ICT環境		「デスクトップパソコン」 「ノートパソコン」 「タブレット」 「スマートフォン」 「その他」
	11. 遠隔カンファレンスへの参加方法について	
カンファレンスの実施状況	12. 臨地（訪問看護ステーション）でのカンファレンスの回数について	「とても多い」 「多い」
	13. 遠隔カンファレンスの回数について	「ちょうどよい」 「少ない」
	14. 遠隔カンファレンスの時間配分について	「とても少ない」
	15. 遠隔カンファレンスの参加人数について	
	16. 臨地（訪問看護ステーション）でのカンファレンスの回数	「1」～「6」を選択
	17. 遠隔カンファレンスの参加人数	「数値」を入力
	18. 遠隔カンファレンスにおいて、良かったことや勉強になったことを自由に記入してください	自由記述
オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果と課題について	19. 遠隔カンファレンスにおいて、困ったことや改善してほしいことがあれば自由に記入してください	自由記述

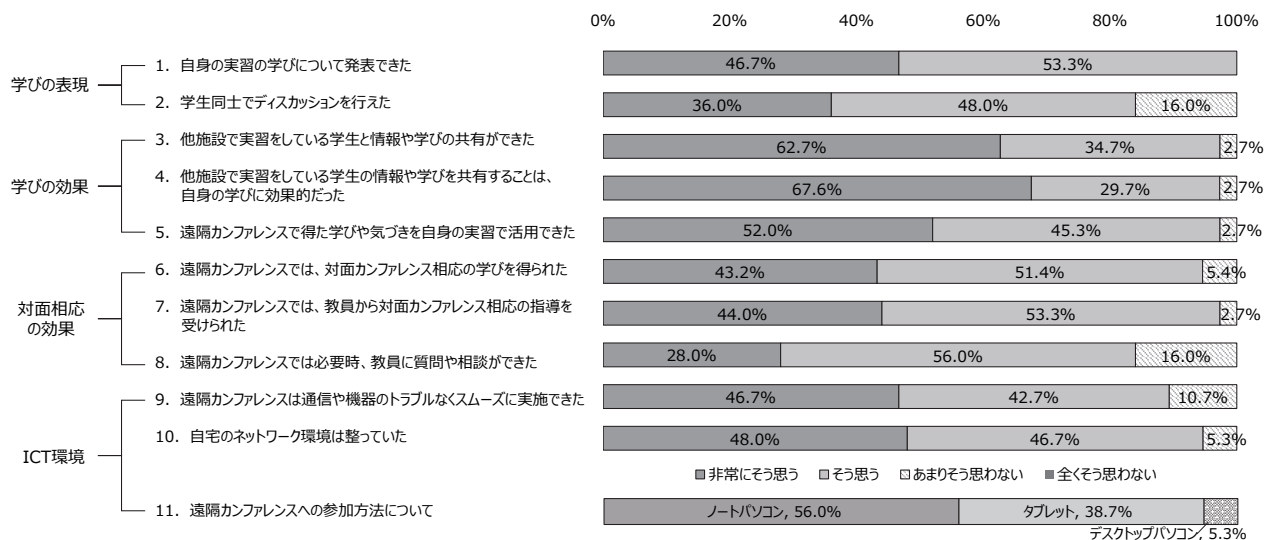
## V. 結果

対象学生116名に研究依頼を行い、75名の回答が得られた（回収率64%）。以下に選択式および自由記述式の結果を記す。

### 1. 『学びの表現』『学びの効果』『対面相応の効果』『ICT環境』についての結果

設問「1. ～ 10.」のすべてにおいて「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生は合わせて84%～100%であった（表2）。

表2. 『学びの表現』『学びの効果』『対面相応の効果』『ICT環境』についての結果



『学びの表現』について問う2項目は「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生は合わせて84%～100%であった。特に「1. 自身の実習の学びについて発表できた」は「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生は合わせて100%であり、回答者の全員が遠隔カンファレンスにおいて、自身の学びを発表できた結果となった。「2. 学生同士でディスカッションを行えた」は84%の学生が「非常にそう思う」「そう思う」と回答したが、他の質問項目の中で一番低かった。

『学びの効果』について問う3項目は「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生はいずれも97.3%であった。「3. 他施設で実習をしている学生と情報や学びの共有ができた」「4. 他施設で実習をしている学生の情報や学びを共有することは、自身の学びに効果的だった」「5. 遠隔カンファレンスで得た学びや気づきを自身の実習で活用できた」については、いずれも97.3%が「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。

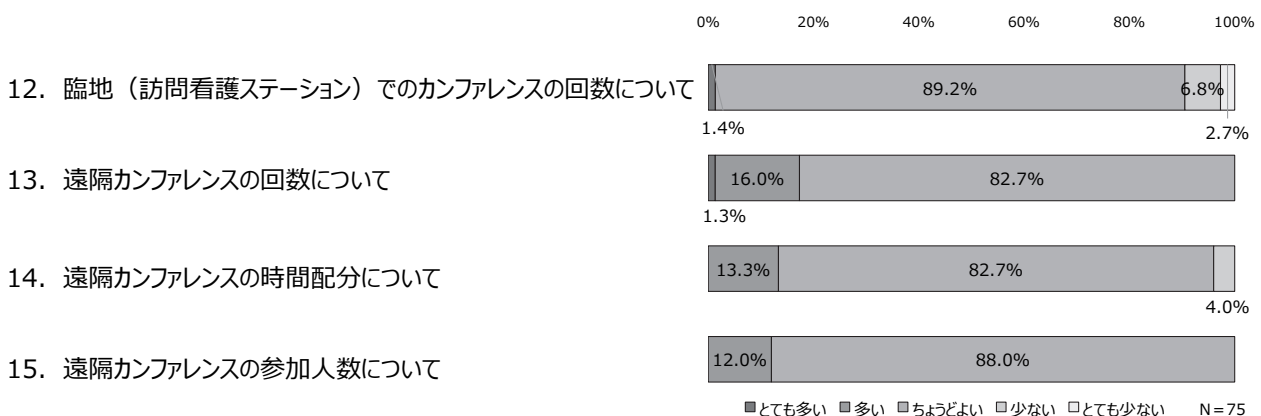
『対面相応の効果』について問う3項目は「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生は合わせて84%～97.3%であった。「6. 遠隔カンファレンスでは、対面カンファレンス相応の学びを得られた」は94.6%が「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。「7. 遠隔カンファレンスでは、教員から対面カンファレンス相応の指導を受けられた」は97.3%が「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。「8. 遠隔カンファレンスでは必要時、教員に質問や相談ができた」については、84%の学生が「非常にそう思う」「そう思う」と回答したが、「2.」の項目と同様に他の質問項目の中で一番低かった。

『ICT環境』について問う3項目は、「9. 遠隔カンファレンスは通信や機器のトラブルなくスムーズに実施できた」は89.3%が「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。「10. 自宅のネットワーク環境は整っていた」は94.7%が「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。また、「11. 遠隔カンファレンスへの参加方法について」は「ノートパソコン」が56%と最も多く、次いで「タブレット」38.7%、「デスクトップパソコン」5.3%の順であった。「スマートフォン」から参加したと回答した学生はいなかった。

## 2. 『カンファレンスの実施状況』についての結果

設問「12. ～15.」のすべてにおいて「ちょうどよい」と回答した学生は合わせて82.7%～89.2%であった(表3)。

表3. 『カンファレンスの実施状況』についての結果





『カンファレンスの実施状況』について問う4項目は「12. 臨地（訪問看護ステーション）でのカンファレンスの回数について」「15. 遠隔カンファレンスの参加人数について」は88%以上が「ちょうどよい」と回答した。「13. 遠隔カンファレンスの回数について」「14. 遠隔カンファレンスの時間配分について」はいずれも82.7%が「ちょうどよい」と回答した。また、「13. 遠隔カンファレンスの回数」「14. 遠隔カンファレンスの時間配分」「15. 遠隔カンファレンスの参加人数」について、12%～16%の学生が「多い」と回答した。「16. 臨地（訪問看護ステーション）でのカンファレンスの回数」は「1回」が71%と最も多く、次いで「0回」が15%、「4回」と「5回」が4%、「6回」が3%、「2回」が2%、「3回」が1%の順であった（表4）。

表4. 臨地（訪問看護ステーション）のカンファレンスの回数

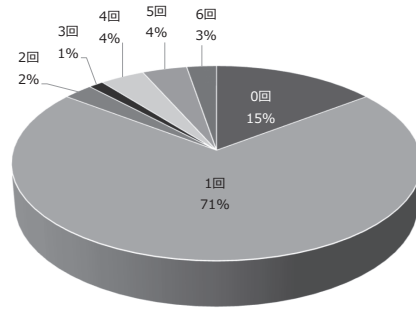
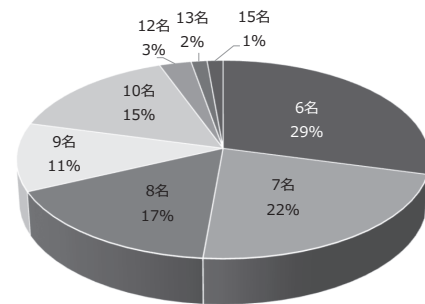


表5. 遠隔カンファレンスの参加人数



「17. 遠隔カンファレンスの参加人数」は、「6名」が29%と最も多く、次いで「7名」が22%、「8名」が17%、「9名」が11%、「10名」が15%、「12名」が3%、「13名」が2%、「15名」が1%の順であった（表5）。

### 3. 『オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果と課題について』の結果

#### 1) オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果

『オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果と課題について』問う2設問の内、「18. 遠隔カンファレンスにおいて、良かったことや勉強になったことを自由に記入してください」からは、遠隔カンファレンスの効果に関連する記述のあった53名の回答を分析対象とした。67のコードが抽出され、さらにその内容を研究者が分析した結果、大きく4つのカテゴリに分類された（表6）。カテゴリを【 】, その内容を示すサブカテゴリを< >で記す。

表6. オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
自身の学びが拡張した	他施設で実習している学生と情報や学びの共有ができた	14
	自身が経験できなかった学びを他施設で実習している学生から得られた	9
	他施設で実習している学生との学びの共有により自身の学修を深められた	12
	他施設で実習している学生の学びからあらたな気づきを得られた	8
他施設で実習している学生の学びを自身の実習で活用できた	自身の学びを整理するのに効果的だった	7
	実習における目標が明確になった	7
対面よりも意見が発表しやすかった	リラックスして発表することができた	3
	他の学生の表情や反応が分かりやすかった	2
遠隔でも対面と相応にカンファレンスを実施できた	遠隔でもスムーズにカンファレンスを実施できた	3
	教員に適宜相談ができた	2

分類されたカテゴリは、【自身の学びが拡張した】【他施設で実習している学生の学びを自身の実習で活用できた】【対面よりも意見が発表しやすかった】【遠隔でも対面と相応にカンファレンスを実施できた】であった。

【自身の学びが拡張した】は他施設で実習している学生との学びの共有を示す4つのサブカテゴリからなり、＜他施設で実習している学生と情報や学びの共有ができた＞＜自身が経験できなかった学びを他施設で実習している学生から得られた＞＜他施設で実習している学生との学びの共有により自身の学修を深められた＞＜他施設で実習している学生の学びからあらたな気づきを得られた＞が抽出された。【他施設で実習している学生の学びを自身の実習で活用できた】は他施設で実習している学生からの学びの活用を示す2つのサブカテゴリからなり、＜自身の学びを整理するのに効果的だった＞＜実習における目標が明確になった＞が抽出された。【対面よりも意見が発表しやすかった】は遠隔カンファレンスでの意見の発表のしやすさを示す2つのカテゴリからなり、＜リラックスして発表することができた＞＜他の学生の表情や反応が分かりやすかった＞が抽出された。【遠隔でも対面と相応にカンファレンスを実施できた】は遠隔でも対面と相応に実施できたことを示す2つのカテゴリからなり、＜遠隔でもスムーズにカンファレンスが実施できた＞＜教員に適宜相談ができた＞が抽出された。

## 2) オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの課題

『オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果と課題について』問う2設問の内、「19. 遠隔カンファレンスにおいて、困ったことや改善してほしいことがあれば自由に記入してください」から、遠隔カンファレンスの課題に関連する記述のあった19名の回答を分析対象とした。21のコードが抽出され、さらにその内容を研究者が分析した結果、大きく3つのカテゴリに分類された(表7)。

表7. オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの課題

カテゴリ	サブカテゴリ	コード数
遠隔カンファレンスに対する不慣れ感がある	対面よりも意見を発言しづらい	8
	スムーズに司会者が決まりにくい	4
運営方法によって教育効果に差が生じる可能性がある	各分科会の学生人数が異なるため、発表時間に差があった	4
	各分科会のメンバーが毎回固定されていた	1
参加する学生のICT環境によって教育効果に差が生じる可能性がある	自身のICT環境により弊害が生じた	2
	他の学生のICT環境により弊害が生じた	2

分類されたカテゴリは、【遠隔カンファレンスに対する不慣れ感がある】【運営方法によって教育効果に差が生じる可能性がある】【参加する学生のICT環境によって教育効果に差が生じる可能性がある】であった。

【遠隔カンファレンスに対する不慣れ感がある】は、発言のしづらさや司会の決めづらさを示す2つのサブカテゴリからなり、＜対面よりも意見を発言しづらい＞＜スムーズに司会者が決まりにくい＞が抽出された。【運営方法によって教育効果に差が生じる可能性がある】は分科会毎で運営方法の違いを示す2つのサブカテゴリからなり、＜各分科会の学生人数が異なるため、発表時間に差があった＞＜各分科会のメンバーが毎回固定されていた＞が抽出された。【参加する学生のICT環境によって教育効果に差が生じる可能性がある】はICT環境による弊害を示す2つのサブカテゴリからなり、＜自身のICT環境により弊害が生じた＞＜他の学生のICT環境により弊害が生じた＞が抽出された。

## VI. 考察

選択式および自由記述式の結果を基に、オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの「効果」と「課題」について下記に考察を述べる。

### 1. オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果

#### 1) 自身の学びが拡張した

『学びの効果』について問う「3. 他施設で実習をしている学生と情報や学びの共有ができた」「4. 他施設で実習をしている学生の情報や学びを共有することは、自身の学びに効果的だった」について、「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生の割合は非常に高く、他施設で実習をしている学生と学びを共有することは、自身の学びの幅を広げることができる考える。これは自由記述の中にも【自身の学びが拡張した】として表出された。

この理由として、臨地で実施されるカンファレンスで学びを共有できるのは同実習施設に配置された学生間だけで、当然他施設で実習中の学生の学びは共有できない。しかし、本科目で取り入れた「ハイブリッド型」は、複数の実習施設で実習中の学生で構成される分科会で遠隔カンファレンスを実施するため<他施設で実習している学生と情報や学びの共有ができた>ようになる。和田ら<sup>5)</sup>は、グループ間でのカンファレンスは学びの広がりや体験につながったと述べている。こうして、複数の多角的な視点に触れることで<他施設で実習している学生の学びからあらたな気づきを得られた>につながり、自身の学びが拡張したと考えられる。また、実習施設である複数の訪問看護事業所は、立地・開設主体・併設施設・職員構成・利用者の内訳等が異なる。さらに在宅療養者には、疾病や障害・療養環境・家族背景・価値観等が異なるさまざまな方がおられる。そしてこの療養者を支援する訪問看護とは、より個別性が高いまさにオーダーメイドの看護である。そのため、<自身が経験できなかった学びを他施設で実習している学生から得られた>ことは自身の学びに大変効果的であったと考えられる。このように、他施設で実習中の学生と臨地実習終了後にカンファレンスを行えることは遠隔カンファレンスの大きな利点のひとつであり、<他施設で実習している学生との学びの共有により自身の学修を深められた>機会になったと考えられる。

#### 2) 他施設で実習している学生の学びを自身の実習で活用できた

『学びの効果』について問う「5. 遠隔カンファレンスで得た学びや気づきを自身の実習で活用できた」については、「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生の割合は非常に高く、単なる学びにとどまらず、その後の実習における学修への意識変容へ繋がっていたことが明らかになった。これは、自由記述の中にも、【他施設で実習している学生の学びを自身の実習で活用できた】として表出されている。

その理由として、遠隔カンファレンスで他施設の学生と学びを共有したことで、これまでとは異なる広い視点で臨地実習での事象を振り返ることができたと考える。竹村<sup>6)</sup>は、「臨地実習におけるカンファレンスは、学生が自己の行動を振り返り、看護の対象者である人の理解や必要な看護について考えを深め、学生同士で共有しあう機会となる教育的な場である」と述べている。こうして、遠隔カンファレンスでも、臨地実習と同様に、自身の行動の振り返りと学生同士での共有を経て、あらたに得た学びや気づきに繋がったのだと考える。これによって自身の内省が促され、必要な視点が焦点化されたことが、<自身の学びを整理するのに効果的だった>と考える。さらに、翌日以降の<実習における目標が明確になった>ことから、他施設で実習している学生から受けた刺激が意識変容へ繋がっていたと考えられる。



### 3) 対面よりも意見が発表しやすかった

『学びの表現』について問う「1. 自身の実習の学びについて発表できた」「2. 学生同士でディスカッションを行えた」については、「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生の割合は非常に高く、殆どの学生が遠隔カンファレンスの場においても自身の学びを表現することができたと考える。これは、自由記述の中にも【対面よりも意見が発表しやすかった】として表出されていた。

その理由は、<リラックスして発表することができた>というサブカテゴリに示されている。幕内ら<sup>7)</sup>のオンラインで実施されたロールプレイ実習の報告によると医学部の学生から、「オンラインだからこそ周囲の音が気にならず、学生同士が雑談できない環境に置かれていることで集中できた」「自宅から参加している学生は例年よりリラックスしている印象だった」といった意見があり、自宅からオンライン上で繋がることで、逆にコミュニケーションを取りやすい環境が整っていた可能性があることが述べられていた。

このことから、学生は自宅から遠隔カンファレンスへ参加することで対面よりも緊張せずに発表がしやすくと感じたと考えられる。また、画面越しにく他の学生の表情や反応がわかりやすかった<>と感じる学生がおり、表情や頷き等の相手への共感を示す反応に安心して発表することができたと考える。

### 4) 遠隔でも対面と相応にカンファレンスを実施できた

『対面相応の効果』について問う「6. 遠隔カンファレンスでは、対面カンファレンス相応の学びを得られた」「7. 遠隔カンファレンスでは、教員から対面カンファレンス相応の指導を受けられた」「8. 遠隔カンファレンスでは必要時、教員に質問や相談ができた」については、8割以上の学生が「非常にそう思う」「そう思う」と回答した。遠隔カンファレンスは、学生同士での意見交換、教員から指導が受けられる教育的な場であり、対面相応の効果があった。これは自由記述の中の、【遠隔でも対面と相応にカンファレンスを実施できた】に示されている。

視聴覚教材を用いたオンラインでの在宅看護学実習を行った末田<sup>8)</sup>らは、オンラインだと教員と学生がタイムリーに関わる時間をもてたことが目標の達成に効果的であったと述べている。教員が1日に巡回できる実習施設には限界があり、毎日学生と話すことができないが、遠隔カンファレンスでは、オンライン上でコミュニケーションが図れ、学生の様子から異変や変化等に気づき、タイムリーに指導や対応ができた。同様に学生も、<教員に適宜相談ができた>ことによって、対面と遠隔に差がないことを実感したと考える。

『ICT環境』について問う「9. 遠隔カンファレンスは通信や機器のトラブルなくスムーズに実施できた」「10. 自宅のネットワーク環境は整っていた」についても「非常にそう思う」「そう思う」と回答した学生の割合は高く、遠隔カンファレンスを行うICT環境が整っていたことが明らかになった。

学生は、入学時に「タブレット」を1人1台ずつ貸与されているが、遠隔カンファレンスへ参加時のデバイスは半数以上が「ノートパソコン」を使用しており、「タブレット」を使用していた約4割の学生を上回っていた。画面の見やすさや機能性から「ノートパソコン」を選ぶ学生が多かったことが推察される。したがって、遠隔カンファレンスを実施する上で学生のICT環境が整っており、操作も習熟していたため<遠隔でもスムーズにカンファレンスが実施できた>と考える。

『カンファレンスの実施状況』について問う、「16. 臨地(訪問看護ステーション)でのカンファレンスの回数」は7割の学生が実習期間中に1回と回答した。これは、実習施設へ実習最終日に最終カンファレンスの実施を依頼していたためである。臨地でのカンファレンスの回数について、約9割の学生が「ちょうどよい」と回答した。その理由は、臨地でのカンファレンス以外に教員と学生間での「遠隔カンファレ

ンス」を実習期間中に4回実施していることが前提になっていることが考えられる。つまり、臨地でのカンファレンスが1回と遠隔カンファレンスが4回の計5回について肯定的な回答があったということが推察できる。

また、「13. 遠隔カンファレンスの回数について」は、実習期間中は全4回であって、約8割の学生が「ちょうどよい」と回答した。また、「14. 遠隔カンファレンスの時間配分について(表3)」は約8割の学生が「ちょうどよい」と回答した。「15. 遠隔カンファレンスの参加人数について」は約7割が6名～8名であって、約9割に近い学生が「ちょうどよい」と回答した。このことから、本科目で実施した「遠隔カンファレンス」の回数・カンファレンスの時間配分・参加人数は概ね妥当であったと考えられる。

## 2. オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの課題

### 1) 遠隔カンファレンスに対する不慣れ感がある

『学びの表現』について問う「2. 学生同士でディスカッションを行えた」は16%の学生が「あまりそう思わない」と回答した。また、『対面相応の効果』について問う「8. 遠隔カンファレンスでは必要時、教員に質問や相談ができた」は16%の学生が「あまりそう思わない」と回答した。これは、自由記述の中の【遠隔カンファレンスに対する不慣れ感がある】にも示されている。

多くの学生は、遠隔カンファレンスは対面よりも意見を発表しやすいと感じていたが、一方で<対面よりも意見を発言しづらい>と感じる学生もいた。幕内ら<sup>7)</sup>は、オンライン上で、グループ内での雑談タイムを戦略的に取り入れることでグループ全体としての一体感やリラックスできる空気感を醸成できることを提案している。遠隔カンファレンスが苦手と感じてしまう学生でも安心して話せるように冒頭で雑談等のアイスブレイクを効果的に導入したりすることも重要だと考える。また、分科会では毎回カンファレンス前に学生間で司会者を決定してもらっていた。この際、対面よりも<スムーズに司会者が決まりにくい>と感じた学生が複数いた。決定までに時間を要してしまうとカンファレンスの時間が減ったり、静寂が続いてしまうこともあった。小野ら<sup>9)</sup>は、オンライン上のカンファレンスでのマナーやルールを設けることや、学生の学習状況や心身の健康状態などの確認をし、通常と異なる授業形態による困りごとやストレスへのサポートの必要性を述べている。今後は、事前に司会者を決定する際のルールを設けておく等の工夫があるとよいと考える。また、『カンファレンスの実施状況』について問う「13. 遠隔カンファレンスの回数」「14. 遠隔カンファレンスの時間配分」について、13.3%～17.3%の学生が「多い」「とても多い」と回答した。多くの学生にとっては「ちょうどよい」と感じる場合でも、中には負担やストレスに感じてしまう学生もいることを示している。したがって、教員は授業形態に不慣れな学生、負担やストレスになる可能性がある学生、質問や相談が苦手な学生がいることを意識し、注意深く学生の様子を観察しながら配慮した上で授業を進めていくことが重要である。

### 2) 運営方法によって教育効果に差が生じる可能性がある

『カンファレンスの実施状況』について問う「15. 遠隔カンファレンスの参加人数」について、12%の学生が「多い」と回答した。これは、教員が担当する施設数及び学生数に応じて、分科会の構成人数に差が生じることがあり、自由記述の中でも【運営方法によって教育効果に差が生じる可能性がある】ことが示された。

この理由として、分科会の構成人数は、68%の学生が6～8名、26%の学生が9名～10名と回答した。6%の学生が12名～15名と回答したが、これはアンケート調査の際に「分科会の学生人数」と明確な指

示がなかったため教員や全体会の人数もカウントしてしまったからだと考える。実際の構成人数は、最小6名、最大10名であった。つまり、<各分科会の学生人数が異なるため、発表時間に差があった>ことが示されたと考えられる。構成人数が多いと、学生ひとりに対する発表時間や教員の指導時間が少なくなる。これは、学生への公平性の観点からも同じ条件で運営する必要がある。また、<各分科会のメンバーが毎回固定されていた>と感じる学生もいた。毎回の遠隔カンファレンスは同様のメンバーで意見交換を行う。学修意欲が高い学生は、まだ意見交換をしていない他施設で学ぶ学生の学びを聞きたいと考える場合もあるだろう。今後の分科会のメンバー構成についてはより学修効果の高い方法を検討していく必要があることがわかった。

### 3) 参加する学生のICT環境によって教育効果に差が生じる可能性がある

『ICT環境』について問う「9. 遠隔カンファレンスは通信や機器のトラブルなくスムーズに実施できた」で10.7%の学生が、「あまりそう思わない」と回答した。これは、自由記述の【参加する学生のICT環境によって教育効果に差が生じる可能性がある】に示されている。

分科会のいずれかのメンバーのICT環境が整っていない場合には、<自身のICT環境により弊害が生じた>り、<他の学生のICT環境により弊害が生じた>可能性があることが分かった。具体的には、発言する学生のマイク機能にトラブルが生じると他のメンバーは発言者の声が聞きにくいこと、ネットワーク環境が悪いためか、途中で通信が切れてしまうことがあった。対策としては、参加しているデバイス以外にもう1台デバイスを用意することや、パソコン内蔵型のスピーカーやマイクではなく、マイク機能付のイヤフォンで参加する等の工夫でトラブルを最小限にするように努めた。オンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスは、このような機器やネットワーク環境のトラブルは避けられないため、今後は事前にトラブルに備えた対応について、学生と教員間で共通認識しておくことが不可欠であると考えられる。

## Ⅶ. おわりに

学生のアンケート結果から、在宅看護学実習(ハイブリッド型)におけるオンラインシステムを用いた遠隔カンファレンスの効果として自身や学生間での学びの拡張と活用、意見の発表のしやすさや、遠隔でも対面と相応にカンファレンスを実施できたことが明らかになった。一方、課題として、遠隔カンファレンスに対する不慣れ感や運営方法による教育効果に差が生じる可能性、学生のICT環境による教育効果の差が生じる可能性が明らかになった。本研究を通して、臨地実習での経験が学生の学びにおいて非常に重要であることを再認識できた。遠隔カンファレンスはその学びをより有意義なものにするための効果的な手段であり、この点が「ハイブリッド型」の利点であったと考える。

現在、2023年5月より新型コロナウイルス感染症は5類感染症に移行され、教育現場もコロナ禍以前に戻りつつある。今後は、本学の授業運営に則り、コロナ禍や本研究を経て明らかとなった成果や課題を活かし、教育効果の高い方法や実習設計について工夫や検討を重ねていきたい。

## 謝辞

本研究を実施するにあたり、調査にご協力頂きました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

## 引用・参考文献一覧

- 1) 文部科学省. “遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取扱い等について.” 文部科学省.  
[https://www.mext.go.jp/content/20200501-mxt\\_kouhou02-000004520\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200501-mxt_kouhou02-000004520_3.pdf), (参照2023-3-7).
- 2) 黒河内仙奈, 間瀬由記. 高齢者看護学領域におけるオンラインシステムを用いた統合実習の実践報告. 日本看護学教育学会誌. 2021, 31(2), p.155-156.
- 3) 早瀬麻子, 木下純子, 田尻后子. オンラインでの母性看護学実習における学習効果. 佛教大学保健医療技術学部論集. 2021, 15, p.29-44.
- 4) 近藤美保, 遠藤りら, 長澤利枝, 篁 宗一. オンラインで行う精神看護学実習の事例検討による効果評価. 精神科看護. 2021, 48(8), p.62-70.
- 5) 和田恵美子, 武田未央, 内貴千里. 新型コロナウイルス感染拡大下の在宅支援論実習ー遠隔実習の試みー. 京都看護. 2021, 5, p.37-45.
- 6) 竹村真理. 看護学実習における学生カンファレンス準備教育について. 健康科学大学紀要. 2019, 15, p.43.
- 7) 幕内安弥子, 棚野吉弘, 奥山直木, 福本一夫, 並川浩己, 豊田宏光, 鎌田紀子, 首藤太一. オンライン模擬患者参加型コミュニケーション実習における思わぬ成果と弊害. 医学教育. 2021, 52(3), p.278-279.
- 8) 末田千恵, 富塚美和, 北岡英子. オンラインシステムを活用した混合型在宅看護学実習の実践. 神奈川県立保健福祉大学誌. 2022, 19(1), p.141-149.
- 9) 小野若菜子, 竹森志穂, 西村恵理奈, 森田誠子, 山田雅子. 新型コロナウイルス感染症の影響によるオンラインでの在宅看護実習における教育活動報告. 聖路加国際大学紀要. 2023, 8, p.18-23.

天谷 尚子 (和洋女子大学 看護学部 看護学科 助教)  
平山香代子 (和洋女子大学 看護学部 看護学科 准教授)  
麻生 保子 (和洋女子大学 看護学部 看護学科 教授)

(2023年11月14日受理)